

# 人間関係の調和は自文化中心主義につながるのか

## —社会的紛争の心理と幸福感の関係に関する実証的検討—

社会的紛争と幸福感研究（課題番号177101）

研究期間：平成29年7月25日～令和2年3月31日

研究代表者：一言英文 研究員：縄田健悟

### 背景と目的

現代は、経済的なグローバリズムと社会文化的なローカル化が地球上の様々な地域で社会的紛争を生む時代である。ヘロドトスが指摘したように、人間の本質的な普遍性と多様性に根差したこの問題に対する解は単純ではないものの、社会的紛争を生むメカニズムを実証的に解明することは平和への第一歩である。本研究では、社会的紛争の火種とも言える自文化中心主義の要因としての関係調和性に着目する。

身近な他者との人間関係が良好な状態にあることは、社会的な動物である人間にとって重要な幸福の源泉である。しかし、内集団ひいきや自文化中心主義といった、内集団を外集団よりも優れたものと過度に信じることで成り立つ排他的な心の特徴が人間のこの本質的な関係調和性とどのような関係にあるかについての明確な知見は得られていない。そこで本研究では、申請者らが標準化した心理測定法を用い、人間の関係性と排他性との関係を実証心理学的に検討することを目的とする。

### 協調的幸福感とそのダークサイド

身近な他者との人間関係が良好な状態にあることは、申請者が標準化した「協調的幸福感尺度（項目例：自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちで居ると思う）」で測定することができる（Hitokoto & Uchida, in press; Hitokoto, 2016; Hitokoto & Uchida, 2015）。これまでの研究では、本尺度得点とその周辺概念との相関関係を、国際的なデータを収集することで検討してきた（平成28～29年度科学研究費助成金採択研究〈若手B〉）。その中には、自文化中心主義と強い関連のある「集合的共同的ナルシズム（項目例：私の国ほど道徳的な国はとても少ないと思う）」や「集合的ナルシズム（項目例：私の国は特別扱いを受けるべきだと思う）」といった概

念との、国を超えた正の相関が確認されている。つまり、関係性と排他性には正の相関関係が確認されている。

この背景にはいくつかの要因が考えられるが、その代表的なものの一つに、集団活動と天秤にかけた際に異質な個人を排除しようとする「排斥への正当性評価（玉井・五十嵐, 2014）」が関わると考えられる。この概念は、いわゆる社会的アイデンティティや、集団のために戦う態度（Swann, Buhrmester, Gomez, Jetten, Bastian, Vazquez, et al., 2014）と相関するものであり、自文化中心主義の根幹にかかる概念である。排斥への正当性評価が高い個人ほど、集団活動のために異質な個人を排除することに賛成の態度を持つため、こういった態度は、結果として集団内の凝集性を高める、または、多様性を低めることに繋がる。上述のナルシズムなどは、外的な評価基準としての社会的参照を失うことで促進される面があるが、これなどは集団内の凝集性を偏向させる態度としての排斥への正当性評価が本質的な要因であると考えられる。

### 協調的幸福感と排斥への正当性評価

協調的幸福感は、関係性の調和を内集団で達成することで得られる幸福感である。したがって、内集団の目的のために異質な個人を排除することは調和実現の要因のようにも思われる。しかし、協調的幸福感としての調和とは、厳密には、平穏無事であることや人並みであることを伴う調和であり、異質な個人を攻撃することに必然的に伴うトラブルや、特定の規範を堅持するために能動的に人並みの基準を変えるような試みに伴うコントロール感は、その追求に大きな障壁となると考えられる。協調的幸福感が実現される協調的な自己を共有した文脈においては、人々は相互に平穏にあらうとするのであって、異質を意識しないことは無いとしても、それを積極的に排除することは本質的に別の概念のように思われ

る。むしろ、協調的幸福感は、社会的アイデンティティの「コミットメント（例：集団への愛着）」との相関があると考えられ、この社会的アイデンティティの別側面である「優越視（自集団が他集団より優れているとする自己の状態）」は、確かに排斥への正当性評価を生むかもしれない。

協調的幸福感に排斥への正当性評価と関連する条件があるとしたら、それは幸福感それ自体ではなく、それを追求する段階での「規範化」が要因として考えられる。幸福感のみならず、感情には、それを感じたいという理想感情や、それを感じるべきだとする義務感情の存在が指摘されている（Tsai, 2006）。幸福は、本来肯定的な事態が生じた結果として感じるものであるが、集団主義文化では、幸福の規範（例：どう感じるべきか）が個人の幸福を説明することが知られている（Suh, Diener, Oishi, & Triandis, 1998）。つまり、集団主義文化では、自らがどう感じるかのみならず、どう感じるべきかという義務感情が実際に感じられる幸福感を左右する。本来主観的である感情に関して義務の制約がかかるというのは、一般的な他者や自分自身により、その要求や期待、共有されている規範に対して達し得なかった場合の制裁／自責が可能になるということである。この「他者と調和するべき／しなければならない」という信念は、特に、結果として調和を保てない場合に、自らが内集団を去るか、あるいは、調和を保てない理由を探すことに繋がると考えられる。前者は社会の流動性が高い場合には可能であるかもしれないが、集団主義文化ではこの難易度が著しく高い。後者は、調和を保てない理由を内集団の中に求めることに繋がり、ここで、異質な個人に対する排斥を正当化する可能性がある（例：“私が（和を感じるべきなのに）和が感じられないのは、あの異分子が居るせいだ”）。すなわち、「協調的幸福感の規範」という概念を想定したときに、これが直接に排斥への正当性評価と関連する、または、この規範が協調的幸福感と共に排斥への正当性評価を説明することが予想される。

なお、日本はそもそも、規範からの逸脱に強い罰を奨励するタイトな文化の一つである（Gelfand, Raver, Nishii, Leslie, Lun, Lim, et al., 2011）。タイトな文化では、特に規範を逸脱した者に対する否定的な行動が（規範を逸脱したという理由のみで）是認されやすい。このことを鑑みても、タイトな集団主義文化における「協調的幸福感の規範」は、特にそれが他者との関係性を前提とする幸福感であるがゆえに、いわば、幸福感の「あるべき姿の押し付け」が相互に生じるということである。関係性の調和が個人単独では達成することが難しい性質を持つために、相互に、関係性の調和についての明示・暗黙にわたる要求、強制、または罰が生じやすく、その犠牲となりやすいのは、特に集団での調和を義務としたときの異質な個人となる。結果として、「協調的幸福感の規

範」は、集団の閉鎖的な凝集性を高め、その集団の異質性排除を高めてしまうと考えられる。

### 本研究の目的

以上の分析により、協調的幸福感は異質性排除とは本来に異なることを本研究では検討する。具体的に本研究では、協調的幸福感が排斥への正当性評価と持つ関連を明らかにしつつ、両者に相関がみられうる境界条件についても検討する。具体的には、（１）協調的幸福感単独では異質性排除に結びつかないものの、（２）協調的幸福感の規範については異質性排除に結びつくこと、さらに、（３）協調的幸福感の規範を高く持つ個人の協調的幸福感が低い場合、異質性排除が高くなることを検討した。

本研究では、上記の仮説について個人差変数としての性別、年齢、パーソナリティを統計的に統制して行った。性別と年齢の統制に関しては、これまでの研究で協調的幸福感やその関連概念との相関に性差が見られること、集団主義文化では年齢と協調的幸福感の関連が見られることなどを踏まえて行った。パーソナリティについては、基本的な個人差概念として、特に社会的刺激に開かれやすい外向性、否定的な感情への感受性が高い神経質傾向、他者との親和性に関わる調和性、そして未知の経験に対して受容的な開放性など、本研究の被説明変数である排斥の正当性評価に関わるこれら基本的パーソナリティを統制することで、本研究の仮説が個人の性格的特徴とは一線を画すことを検討した。

### 方法

**参加者** 日本人社会人900名（成人のみ）を対象とした。デモグラフィック質問への回答欠損者、および、回答態度確認項目（特定の選択肢への回答をあえて求める質問項目）への問題回答者が19名であり、これらは以降の分析から省いた。また、社会人を対象とした分析に限定するため、専門学校生、大学生および大学院生のデモグラフィーを持つ参加者を以降の分析から省いた。結果、752名の日本人社会人を分析対象者とした。

**調査** 47都道府県で社会調査を実施し、事前の参加同意を得たものを対象に調査を回収した。752名の分析対象者のデモグラフィーとしては：性別（男性：343名、女性409名）、平均年齢  $M_{age} = 47.12$  ( $SD = 13.27$ )、婚姻状況（未婚：267名、既婚485名）、世帯収入（Median = 400～600万未満）であった。その他のデモグラフィーについては表1に掲載する。

**調査項目** 排斥への正当性評価については、玉井・五十嵐（2014）で標準化されたものを用いた。項目は、「集団に不必要なメンバーを取り除くことは、行われるべき行為である」「集団の結束を固くするためには、自己中

表1 参加者の属性

| 地域   | 度数  | 世帯収入         | 度数  | 職業        | 度数  |
|------|-----|--------------|-----|-----------|-----|
| 北海道  | 40  | 200万未満       | 51  | 公務員       | 24  |
| 東北地方 | 57  | 200～400万未満   | 155 | 経営者・役員    | 6   |
| 関東地方 | 245 | 400～600万未満   | 167 | 会社員(事務系)  | 106 |
| 中部地方 | 136 | 600～800万未満   | 109 | 会社員(技術系)  | 86  |
| 近畿地方 | 119 | 800～1000万未満  | 67  | 会社員(その他)  | 105 |
| 中国地方 | 46  | 1000～1200万未満 | 23  | 自営業       | 31  |
| 四国地方 | 28  | 1200～1500万未満 | 14  | 自由業       | 17  |
| 九州地方 | 81  | 1500～2000万未満 | 9   | 専業主婦(主夫)  | 162 |
|      |     | 2000万円以上     | 5   | パート・アルバイト | 113 |
|      |     | わからない        | 66  | その他       | 23  |
|      |     |              |     | 無職        | 79  |
| 欠損値  | 129 | 欠損値          | 215 | 欠損値       | 129 |
| 合計   | 881 | 合計           | 881 | 合計        | 881 |

心的なメンバーは集団に所属させるべきではない」など7項目で、5段階リカート法（1：まったくそう思わない～5：とてもそう思う）で評定させた（ $\alpha = .85$ ）。協調的幸福感は、Hitokoto & Uchida (2015) によって標準化された日本語版を用いた。項目は、「自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う」「平凡だが安定した日々を過ごしている」など9項目で、参加者に5段階リカート法（1：全く当てはまらない～5：非常に当てはまる）で評定させた（ $\alpha = .92$ ）。協調的幸福感の規範については、本研究で作成した3項目を用い、それらは協調的幸福感の3因子(Hitokoto & Takahashi, 査読中)から1項目ずつ取り出して義務的表現とした項目を用いた。具体的には、「一般的に言って、一人だけでなく、その人のまわりの人も楽しい気持ちでいるべきだと思う」「一般的に言って、平凡でも安定した日々を過ごすべきだと思う」「一般的に言って、平凡でも安定した日々を過ごすべきだと思う」を用いた（ $\alpha = .70$ ）。パーソナリティ特性については、小塩・阿部・ピノ (2012) の日本語版 TIPI-J を持ちいた。項目は、「私は自分のことを、活発で、外向的だと思う」などの10項目（各因子2項目）であり、7段階リカート法（1：まったくそう思わない～7：とてもそう思う）で評定させた

（ $\alpha = .40 \sim .62$ ）。

また、被説明変数の妥当性を確認するため、社会的アイデンティティ尺度 (Roccas, Klar, & Liviatan, 2006) の「コミットメント」(項目例「私は日本に強く愛着を感じる」) と、「集団のための闘争態度」(Swann et al., 2014) (項目例「日本を守ることになるのなら、誰かを傷つけることに異存はない」) を、日本(人)を対象集団として用いた。排斥への正当性評価は、これらと正の相関関係にあることが予想された。

## 結果

**記述統計** 分析対象の変数について、記述統計値を表2に示す。続いて、仮説検証の回帰分析に用いる主要な変数について、相関係数を表3に掲載する。表3に見られるように、排斥への正当性評価は集団のための闘争態度（ $r = .21, p < .01$ ）やコミットメント（ $r = .08, p < .05$ ）と正の相関を示したため、被説明変数の妥当性が確認された。また、仮説に直接関わる協調的幸福感および協調的幸福感の規範と、排斥への正当性評価との間には、前者が負の、後者が正の相関が確認された。これら単純な相関の結果は、仮説を支持するものである。続いて、回

表2 記述統計

| 変数名           | 有効N | 平均値  | 中央値  | 標準偏差 | 分散   | 最小値 | 最大値 |
|---------------|-----|------|------|------|------|-----|-----|
| 排斥への正当性評価     | 752 | 2.93 | 3.00 | 0.66 | 0.44 | 1   | 5   |
| 協調的幸福感        | 752 | 3.15 | 3.22 | 0.81 | 0.66 | 1   | 5   |
| 協調的幸福感の規範     | 752 | 3.57 | 3.67 | 0.64 | 0.42 | 1   | 5   |
| パーソナリティ 外向性   | 752 | 3.69 | 3.50 | 1.36 | 1.84 | 1   | 7   |
| パーソナリティ 調和性   | 752 | 4.79 | 5.00 | 1.11 | 1.24 | 1   | 7   |
| パーソナリティ 勤勉性   | 752 | 3.80 | 4.00 | 1.26 | 1.60 | 1   | 7   |
| パーソナリティ 神経質傾向 | 752 | 4.23 | 4.00 | 1.29 | 1.68 | 1   | 7   |
| パーソナリティ 開放性   | 752 | 3.71 | 4.00 | 1.17 | 1.36 | 1   | 7   |
| 集団のための闘争態度    | 752 | 2.39 | 2.43 | 0.77 | 0.60 | 1   | 5   |
| コミットメント       | 752 | 3.08 | 3.13 | 0.69 | 0.48 | 1   | 5   |

表3 各変数間の相関係数

|                   | 1       | 2       | 3       | 4       | 5      | 6       | 7       | 8       | 9       | 10     | 11     | 12 |
|-------------------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|----|
| 1 性別 (1=男性, 2=女性) | -       |         |         |         |        |         |         |         |         |        |        |    |
| 2 年齢              | -.06    | -       |         |         |        |         |         |         |         |        |        |    |
| 3 排斥への正当性評価       | -.12 ** | -.11 ** | -       |         |        |         |         |         |         |        |        |    |
| 4 協調的幸福感          | .20 **  | .12 **  | -.11 ** | -       |        |         |         |         |         |        |        |    |
| 5 協調的幸福感の規範       | .10 **  | .01     | .07 +   | .25 **  | -      |         |         |         |         |        |        |    |
| 6 パーソナリティ 外向性     | .10 **  | .05     | -.02    | .33 **  | .06 +  | -       |         |         |         |        |        |    |
| 7 パーソナリティ 調和性     | .06     | .15 **  | -.09 +  | .36 **  | .15 ** | .01     | -       |         |         |        |        |    |
| 8 パーソナリティ 勤勉性     | .05     | .27 **  | -.05    | .38 **  | .05    | .28 **  | .32 **  | -       |         |        |        |    |
| 9 パーソナリティ 神経質傾向   | .04     | -.16 ** | .06 +   | -.48 ** | -.07 + | -.22 ** | -.40 ** | -.46 ** | -       |        |        |    |
| 10 パーソナリティ 開放性    | -.08 +  | .14 **  | -.04    | .19 **  | -.03   | .32 **  | .06 +   | .29 **  | -.23 ** | -      |        |    |
| 11 集団のための闘争態度     | -.26 ** | .14 **  | .21 **  | .00     | -.03   | -.04    | .01     | .13 **  | -.07 +  | .12 ** | -      |    |
| 12 コミットメント        | -.07 +  | .17 **  | .08 +   | .21 **  | .17 ** | .01     | .21 **  | .16 **  | -.14 ** | .10 ** | .49 ** | -  |

表4 モデル間比較

| モデル   | R <sup>2</sup> | ΔR <sup>2</sup> | Δdf | 誤差df | ΔF値   | p 値  | AIC     | BIC     | CAIC    |
|-------|----------------|-----------------|-----|------|-------|------|---------|---------|---------|
| Step1 | 0.03           | 0.03            | 2   | 749  | 11.31 | 0.00 | 1498.55 | 1517.04 | 1498.61 |
| Step2 | 0.04           | 0.01            | 5   | 744  | 1.02  | 0.41 | 1503.42 | 1545.03 | 1503.67 |
| Step3 | 0.05           | 0.01            | 2   | 742  | 5.29  | 0.01 | 1496.78 | 1547.63 | 1497.14 |
| Step4 | 0.05           | 0.00            | 1   | 741  | 3.88  | 0.05 | 1494.85 | 1550.32 | 1495.27 |

表5 排斥への正当性評価を被説明変数とした階層的重回帰分析における非標準化係数

| 変数名              | Step1    | Step2    | Step3    | Step4    |
|------------------|----------|----------|----------|----------|
| 性別               | -0.17 ** | -0.17 ** | -0.16 ** | -0.17 ** |
| 年齢               | -0.01 ** | -0.01 ** | -0.01 ** | -0.01 ** |
| パーソナリティ 外向性      |          | 0.00     | 0.01     | 0.01     |
| パーソナリティ 調和性      |          | -0.04    | -0.04    | -0.04    |
| パーソナリティ 勤勉性      |          | 0.02     | 0.02     | 0.02     |
| パーソナリティ 神経質傾向    |          | 0.02     | 0.00     | 0.00     |
| パーソナリティ 開放性      |          | -0.02    | -0.01    | -0.02    |
| 協調的幸福感           |          |          | -0.07 +  | -0.07 +  |
| 協調的幸福感の規範        |          |          | 0.12 **  | 0.10 *   |
| 協調的幸福感×協調的幸福感の規範 |          |          |          | -0.08 *  |
| R <sup>2</sup>   | .029 **  | .036 **  | .049 **  | .054 **  |

\*\* p < .01, \* p < .05, + p < .10

帰分析を用いて精査を行った。  
 仮説の検証 排斥への正当性評価を被説明変数、協調的幸福感やその規範、パーソナリティなどを説明変数とした階層的重回帰分析を行った。具体的には、ステップ1として性別と年齢、ステップ2として5次元のパーソ

ナリティ特性、ステップ3として協調的幸福感と協調的幸福感の規範、そして、ステップ4として協調的幸福感と協調的幸福感の規範との交互作用を投入した。階層的重回帰分析の結果をまとめたものを表4および5に示す。

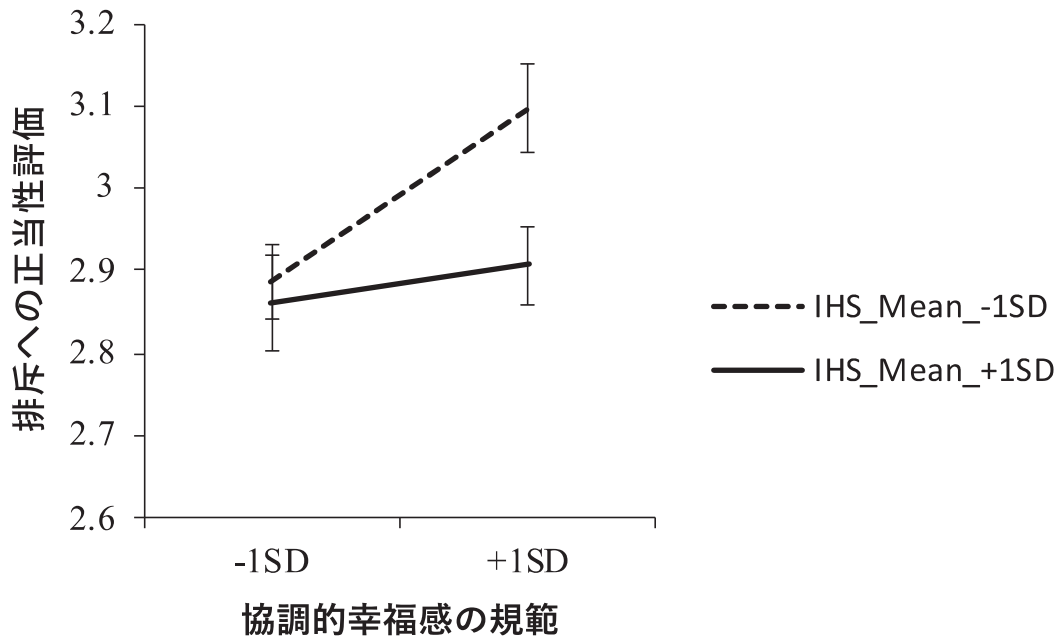


図1 排斥への正当性評価に対する協調的幸福感 (IHS) × 協調的幸福感の規範の交互作用

まず、表4から明らかなように、パーソナリティを説明変数に追加したモデル以外は増大的な効果を示した。なお、パーソナリティの信頼性が低かったためこれを省いた分析を行ったが、以下の仮説に関わる結果に大きな変化は見られなかった。表5には各モデルにおける各説明変数の回帰係数を示す。性別の効果は、男性より女性で ( $B = -.17, p < .01$ )、年齢が高いほど ( $B = -.01, p < .01$ )、排斥への正当性評価が低いことを示唆していた (Step 1)。協調的幸福感は負の有意傾向を示すに留まった ( $B = -.07, p < .1$ )。仮説を支持し、協調的幸福感の規範が排斥への正当性評価を説明していた ( $B = .12, p < .01$ ) (Step 3)。さらに、協調的幸福感と協調的幸福感の規範との交互作用が見られ ( $B = -.08, p < .05$ ) (Step 4)、図1に示すように、協調的幸福感の規範を持ちながらも、協調的幸福感が低い個人において、特に排斥への正当性評価が高くなることが明らかとなった。

## 考察

本研究は、協調性と排他性の関係について、特に排斥の正当性評価を説明するものとしての協調的幸福感と、その規範の効果について社会調査を用いて検討した。結果は仮説を支持し、協調的幸福感の規範と、この規範と協調的幸福感の交互作用が確認された。

この結果は、協調的幸福感のダークサイドについて、社会心理学的なメカニズムを示唆している。すなわち、協調的幸福感は、単独で自文化中心主義に関連するような、いわゆる「内集団ひいき」の直接要因として考えることは妥当ではないが、協調的幸福感を「規範」とした

場合に、和と保つべきとした排斥が正当化されるということである。また、規範と幸福感の交互作用が示すように、規範が満たされていない状態において、この正当化は一段強力になる。これらを総合すると、「調和すべき」という意識を醸成することと、「(結果として) 調和が感じられている」という感覚を醸成することは、排斥という、多様化の文脈においては問題となりやすい心理に対して、まったく異なる働きをすることだと考えられる。

日本における集団主義文化は変容の最中にある。家族のあり方や国籍、職業といったデモグラフィはますます多様化し、内集団の一様性も崩れやすくなっている。ここで問題は、心理的な価値観の変容は、この速度と完全に歩調が合うわけではなく (Hamamura, 2011; Norasakunkit, Uchida, & Toivonen, 2012)、それゆえ、伝統的な協調性への価値やそれを実現することの幸福感の実現には一定の困難が生じると考えられる。本研究が指摘した協調的幸福感の規範化は、このような文化変容の軋轢の中で伝統的にタイトな文化に支えられる形で、さまざまな場面での排斥を正当化することに繋がるのだとすれば、由々しき問題であろう。本研究の結果に従えば、規範化を伴わない協調的幸福感、すなわち、「和を保つべきとは考えない状態で、自生的に感じられる関係調和」の状態をいかに作り出すかが、多様化する現代における価値ある社会心理学的な対策といえよう。

## 引用文献

Gelfand, M. J., Raver, J. L., Nishii, L., Leslie, L. M., Lun, J., Lim, B. C., et al. (2011). Differences Between Tight and Loose Cultures: A 33-Nation Study. *Science*, 332

- (6033), 1100-1104. <http://doi.org/10.1126/science.1197754>
- Hamamura, T. (2011). Are Cultures Becoming Individualistic? A Cross-Temporal Comparison of Individualism-Collectivism in the United States and Japan. *Personality and Social Psychology Review*, 16(1), 3-24. <http://doi.org/10.1177/1088868311411587>
- Norasakkunkit, V., Uchida, Y., & Toivonen, T. (2012). Caught Between Culture, Society, and Globalization: Youth Marginalization in Post-industrial Japan. *Social and Personality Psychology Compass*, 6(5), 361-378. <http://doi.org/10.1111/j.1751-9004.2012.00436.x>
- 小塩真司・阿部晋吾・Cutrone, P. (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 21(1), 40-52.
- Roccas, S., Klar, Y., & Liviatan, I. (2006). The paradox of group-based guilt: Modes of national identification, conflict vehemence, and reactions to the in-group's moral violations. *Journal of personality and social psychology*, 91(4), 698.
- Suh, E., Diener, E., Oishi, S., & Triandis, H. C. (1998). The shifting basis of life satisfaction judgments across cultures: Emotions versus norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(2), 482-493. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.74.2.482>
- Swann, W. B. Jr., Buhrmester, M. D., Gomez, A., Jetten, J., Bastian, B., Vazquez, A., Ariyanto, A., Besta, T., Christ, O., Cui, L., Finchilescu, G., Gonzalez, R., Goto, N., Hornsey, M., Sharma, S., Susianto, H., Zhang, A. (2014). "What makes a group worth dying for?: Identity fusion fosters perception of familial ties, promoting self-sacrifice." *Journal of Personality and Social Psychology*, 106(6), 912-926. doi: 10.1037/a0036089.
- 玉井颯一・五十嵐祐. (2014). 社会的排斥に対する正統性評価尺度の作成. *心理学研究*, 90(2), 187-193. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17338>
- pendent happiness 2. Between narcissism and entitlement: Self-enhancement in a cross-cultural perspective II international conference. Warsaw, Poland.

#### 研究業績：

- 一言英文. (2018). 排斥行動の文化的背景. 第13回日本感情心理学会セミナー. 福岡大学.
- Hitokoto, H. (2019). Cultural and individual level correlates of the interdependent happiness. The 2019 Asian Association for Social Psychology, Academia Sinica, Taipei.
- 一言英文. (2020). 幸福感の文化社会的文脈. 第37回CAPS研究会関西学院大学応用心理科学研究センター. 関西学院大学.
- Hitokoto, H. (2020 : Covid-19により2021へ延期). Cultural and individual level correlates of the interde-